

数値計算

大阪大学基礎工学部

永原正章

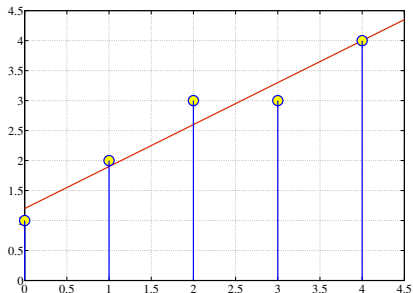
2012年7月26日(5限)

線形近似

データ $(x_1, y_1), \dots, (x_5, y_5)$

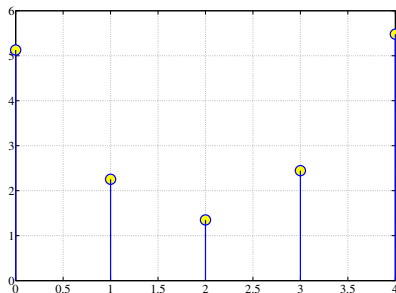
x	0	1	2	3	4
y	1	2	3	3	4

最小2乗近似直線 $y=0.7x+1.2$



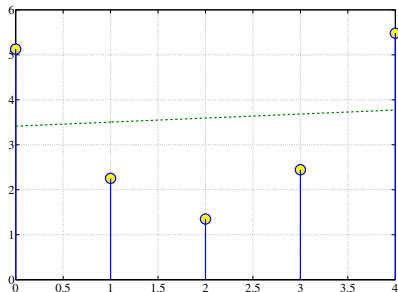
線形近似

次のようなデータが与えられたとする.



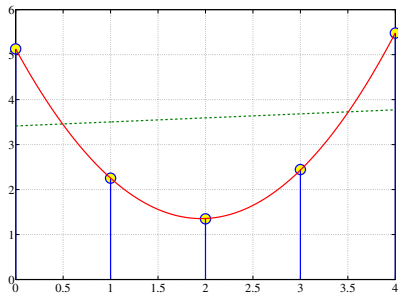
線形近似

線形近似



線形近似

2次曲線 $y = ax^2 + bx + c$ で近似



多項式近似

- N 組のデータ $\{(x_n, y_n)\}_{n=1}^N$ が与えられたとする.
- 次の2乗誤差を最小にする M 次多項式 $f_M(x)$ を求める.

$$E = \sum_{n=1}^N |y_n - f_M(x_n)|^2.$$

- M 次多項式 $f_M(x)$:

$$f_M(x) = c_0 + c_1x + \cdots + c_Mx^M = \sum_{m=0}^M c_mx^m$$

- 正規方程式を別の方法で導出

正規方程式の導出

- 次のベクトルを定義する.

$$\mathbf{c} = [\mathbf{c}_0 \quad \mathbf{c}_1 \quad \dots \quad \mathbf{c}_M]^\top \in \mathbb{R}^{M+1},$$

$$\mathbf{y} := [y_1 \quad y_2 \quad \dots \quad y_N]^\top \in \mathbb{R}^N,$$

$$\begin{aligned} \mathbf{x}_n &:= [x_n^0 \quad x_n^1 \quad \dots \quad x_n^M]^\top \\ &:= [1 \quad x_n^1 \quad \dots \quad x_n^M]^\top \in \mathbb{R}^{M+1}, \quad n = 1, 2, \dots, N \end{aligned}$$

- このとき, $f_M(\mathbf{x}_n) = \mathbf{x}_n^\top \mathbf{c}$ より, 2乗誤差は次のように書ける

$$E = \sum_{n=1}^N |y_n - f_M(\mathbf{x}_n)|^2 = \sum_{n=1}^N |y_n - \mathbf{x}_n^\top \mathbf{c}|^2$$

正規方程式の導出

- 次の行列を定義する (計画行列と呼ぶ).

$$\Phi = \begin{bmatrix} x_1^\top \\ x_2^\top \\ \vdots \\ x_N^\top \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & x_1 & x_1^2 & \dots & x_1^M \\ 1 & x_2 & x_2^2 & \dots & x_2^M \\ \vdots & \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ 1 & x_N & x_N^2 & \dots & x_N^M \end{bmatrix}$$

- すると2乗誤差は次のように書ける

$$E = \sum_{n=1}^N |y_n - x_n^\top \mathbf{c}|^2 = (\mathbf{y} - \Phi \mathbf{c})^\top (\mathbf{y} - \Phi \mathbf{c})$$

正規方程式の導出

■ 評価関数

$$E(\mathbf{c}) = \sum_{n=1}^N |y_n - \mathbf{x}_n^T \mathbf{c}|^2 = (\mathbf{y} - \Phi \mathbf{c})^T (\mathbf{y} - \Phi \mathbf{c})$$

■ Eを \mathbf{c} で微分する (勾配を求める)

$$\nabla E(\mathbf{c}) = -2\Phi^T (\mathbf{y} - \Phi \mathbf{c})$$

■ 正規方程式は $\nabla E(\mathbf{c}) = 0$ において、次式で与えられる.

$$\Phi^T \Phi \mathbf{c} = \Phi^T \mathbf{y}$$

補間多項式

■ 正規方程式

$$\Phi^T \Phi \mathbf{c} = \Phi^T \mathbf{y}$$

■ $M = N - 1$ の場合

Φ は多項式補間のVandermonde行列となり,さらに x_1, \dots, x_N がすべて相異なるとき, Φ は正則となる.したがって,正規方程式の解は,

$$\mathbf{c} = (\Phi^T \Phi)^{-1} \Phi^T \mathbf{y} = \Phi^{-1} \mathbf{y}.$$

このとき,

$$E(\mathbf{c}) = (\mathbf{y} - \Phi \mathbf{c})^T (\mathbf{y} - \Phi \mathbf{c}) = 0$$

となり, E を最小化する(補間多項式に一致する).

Moore-Penrose擬似逆行列★ ★ ★

■ 正規方程式

$$\Phi^T \Phi \mathbf{c} = \Phi^T \mathbf{y}$$

■ $M < N - 1$ の場合

- 行列 $\Phi^T \Phi$ が正則であると仮定すると, 正規方程式の解は

$$\mathbf{c} = (\Phi^T \Phi)^{-1} \Phi^T \mathbf{y} = \Phi^\dagger \mathbf{y}.$$

- $\Phi^\dagger = (\Phi^T \Phi)^{-1} \Phi^T$ は, Φ の Moore-Penrose 擬似逆行列

- 1 $\Phi \Phi^\dagger \Phi = \Phi$
- 2 $\Phi^\dagger \Phi \Phi^\dagger = \Phi^\dagger$
- 3 $(\Phi^\dagger \Phi)^T = \Phi^\dagger \Phi$
- 4 $(\Phi \Phi^\dagger)^T = \Phi \Phi^\dagger$

直交射影 $c = \Phi^\dagger y$

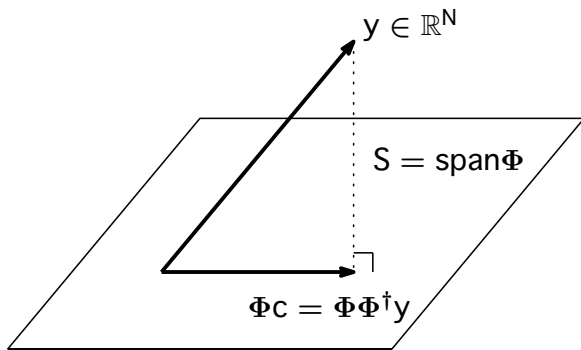
- 行列 Φ の第 m 列ベクトルを ϕ_m とおく. すなわち,

$$\Phi = [\phi_1, \phi_2, \dots, \phi_{M+1}]$$

- $\{\phi_1, \phi_2, \dots, \phi_{M+1}\}$ で張られる \mathbb{R}^N の部分空間を S とおく. すなわち,

$$\begin{aligned} S &= \text{span} \Phi \\ &= \text{span} \{ \phi_1, \phi_2, \dots, \phi_{M+1} \} \\ &= \{ \Phi \alpha \in \mathbb{R}^N : \alpha \in \mathbb{R}^{M+1} \} \subset \mathbb{R}^N \end{aligned}$$

- $\Phi c = \Phi \Phi^\dagger y = \Phi (\Phi^\top \Phi)^{-1} \Phi^\top y$ はベクトル $y \in \mathbb{R}^N$ の部分空間 S への **直交射影** である.

直交射影 $c = \Phi^\dagger y$ 

直交射影 $c = \Phi^\dagger y$

行列 $\Phi^\top \Phi$ が正則のとき, $P = \Phi \Phi^\dagger = \Phi (\Phi^\top \Phi)^{-1} \Phi^\top$ は \mathbb{R}^N から $S = \text{span} \Phi$ への直交射影である. すなわち, 次の3つの性質が成り立つ.

- 1 任意の $x \in \mathbb{R}^N$ に対して, $Px \in S$
- 2 $P^2 = P$
- 3 $P^\top = P$

証明

[1] 任意の $x \in \mathbb{R}^N$ に対して, $Px \in S$ を示す.

- $\Phi \in \mathbb{R}^{N \times (M+1)}$ より, $\Phi^\dagger = (\Phi^\top \Phi)^{-1} \Phi^\top \in \mathbb{R}^{(M+1) \times N}$.
- ゆえに, $x \in \mathbb{R}^N$ に対して,

$$\alpha := \Phi^\dagger x = (\Phi^\top \Phi)^{-1} \Phi^\top x \in \mathbb{R}^{M+1}$$

- したがって,

$$Px = \Phi(\Phi^\top \Phi)^{-1} \Phi^\top x = \Phi \alpha \in S.$$

証明

[2] $P^2 = P$ を示す.

$$\begin{aligned} P^2 &= \Phi(\Phi^T \Phi)^{-1} \underbrace{\Phi^T \Phi (\Phi^T \Phi)^{-1}}_{=I} \Phi^T \\ &= \Phi(\Phi^T \Phi)^{-1} \Phi^T \\ &= P \end{aligned}$$

証明

[3] $P^T = P$ を示す.

$$\begin{aligned} P^T &= \left(\Phi(\Phi^T \Phi)^{-1} \Phi^T \right)^T \\ &= \Phi(\Phi^T \Phi)^{-1} \Phi^T \\ &= P \end{aligned}$$

ただし, 行列の性質, $(AB)^T = B^T A^T$ および, $(A^{-1})^T = (A^T)^{-1}$ を使った.

練習問題

行列 $\Phi^\dagger = (\Phi^\top \Phi)^{-1} \Phi^\top$ が Φ の Moore-Penrose 擬似逆行列であることを示せ. すなわち, 次の4つの等式が成り立つことを示せ.

- 1 $\Phi \Phi^\dagger \Phi = \Phi$
- 2 $\Phi^\dagger \Phi \Phi^\dagger = \Phi^\dagger$
- 3 $(\Phi^\dagger \Phi)^\top = \Phi^\dagger \Phi$
- 4 $(\Phi \Phi^\dagger)^\top = \Phi \Phi^\dagger$

解答例

まず, $\Phi^\dagger \Phi$ を計算すると,

$$\Phi^\dagger \Phi = \underbrace{(\Phi^\top \Phi)^{-1} \Phi^\top}_{\Phi^\dagger} \Phi = (\Phi^\top \Phi)^{-1} \cdot \Phi^\top \Phi = I$$

したがって,

$$1 \quad \Phi \Phi^\dagger \Phi = \Phi (\Phi^\dagger \Phi) = \Phi$$

$$2 \quad \Phi^\dagger \Phi \Phi^\dagger = (\Phi^\dagger \Phi) \Phi^\dagger = \Phi^\dagger$$

$$3 \quad (\Phi^\dagger \Phi)^\top = I^\top = I = \Phi^\dagger \Phi$$

$$4 \quad (\Phi \Phi^\dagger)^\top = [\Phi (\Phi^\top \Phi)^{-1} \Phi^\top]^\top = \Phi (\Phi^\top \Phi)^{-1} \Phi^\top = \Phi \Phi^\dagger$$

例題

- 11点のデータが与えられている

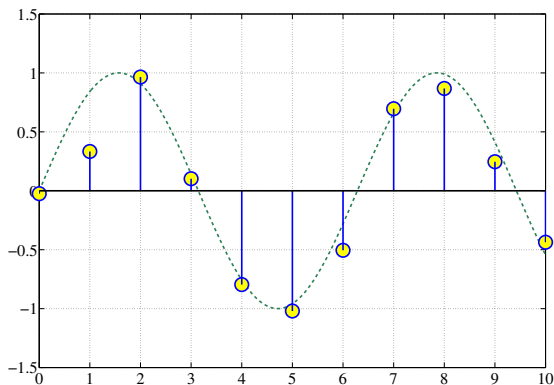
$$x_n = n - 1,$$

$$y_n = \sin(x_n) + \epsilon, \quad n = 1, 2, \dots, 11$$

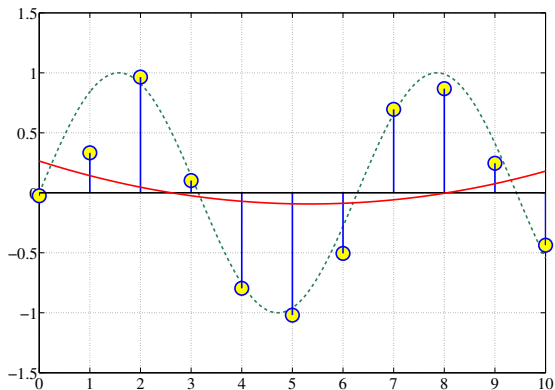
ただし, ϵ は平均0,標準偏差0.2の正規分布に従う確率変数
(Gaussノイズ)

例題

もとの曲線 $y = \sin x$ とデータ $(x_1, y_1), (x_2, y_2), \dots, (x_{11}, y_{11})$

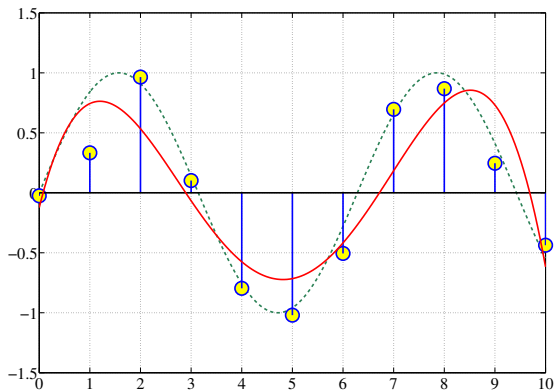


例題

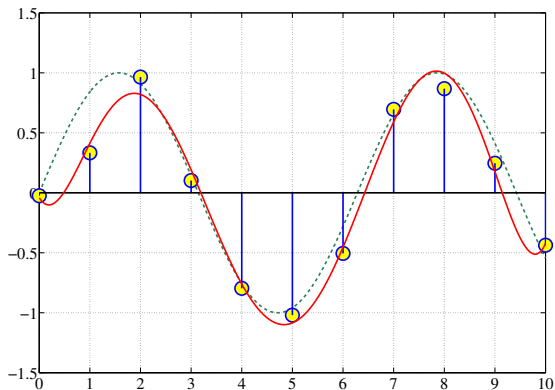
 $M = 2$ 次の多項式による近似

例題

M = 4次の多項式による近似

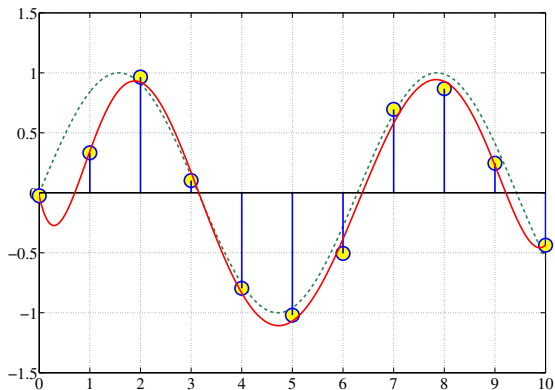


例題

 $M = 6$ 次の多項式による近似

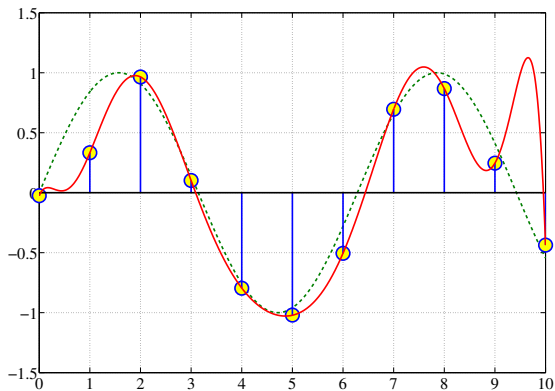
例題

M = 8次の多項式による近似



例題

$M = 10$ 次の多項式による近似 (多項式補間)



多項式の次数M

- 上の例題では $M = 6 \sim 8$ 次の多項式近似が比較的良好な結果を与える.
- 次数が大きいと、データ点の間に誤差が大きくなる(オーバーフィッティング)
- 多項式近似の問題点は次の2点
 - 1 オーバーフィッティングが起きないようにするにはどうすればよいのか?
 - 2 多項式の次数をどう決めるのか?

係数の大きさについて

- $M = 10$ の場合と $M = 6$ の場合の多項式の係数

$$C_{10} = \begin{bmatrix} -0.0248 \\ 0.9783 \\ -4.7147 \\ 8.5862 \\ -6.6640 \\ 2.7528 \\ -0.6727 \\ 0.1007 \\ -0.0091 \\ 0.0005 \\ -0.0000 \end{bmatrix}, \quad C_6 = \begin{bmatrix} -0.0406 \\ -0.6730 \\ 2.0942 \\ -1.2085 \\ 0.2650 \\ -0.0249 \\ 0.0008 \end{bmatrix}$$

正則化法

- オーバーフィッティングが起こるときの多項式の**係数の絶対値は大きい**
- 次数を $M = 10$ にして,**係数を制限**すれば良い
- 次の評価関数を最小化する多項式 $f_M(x) = c_0 + c_1x + \cdots + c_Mx^M$ を求める

$$E_\lambda = \sum_{n=1}^N |y_n - f_M(x_n)|^2 + \lambda \sum_{m=0}^M c_m^2$$

- E_λ の第2項目を**正則化項**と呼ぶ。
また,このような最適化法を**正則化法**と呼ぶ

正則化法

■ 正則化法

$$E_{\lambda} = \sum_{n=1}^N |y_n - f_M(x_n)|^2 + \lambda \sum_{m=0}^M \mathbf{c}_m^2$$

■ E_{λ} を計画行列 Φ を使って書くと

$$E_{\lambda}(\mathbf{c}) = (\mathbf{y} - \Phi \mathbf{c})^{\top} (\mathbf{y} - \Phi \mathbf{c}) + \lambda \mathbf{c}^{\top} \mathbf{c}$$

■ これを最小化する \mathbf{c} は $\nabla E_{\lambda}(\mathbf{c}) = 0$ とおいて求められる

$$\begin{aligned} \nabla E_{\lambda}(\mathbf{c}) &= -2\Phi^{\top} (\mathbf{y} - \Phi \mathbf{c}) + 2\lambda \mathbf{c} \\ &= 2(\lambda \mathbf{I} + \Phi^{\top} \Phi) \mathbf{c} - 2\Phi^{\top} \mathbf{y} = 0 \\ \therefore \mathbf{c} &= \left(\lambda \mathbf{I} + \Phi^{\top} \Phi \right)^{-1} \Phi^{\top} \mathbf{y} \end{aligned}$$

最小2乗法と正則化法

- 最小2乗法による多項式の係数

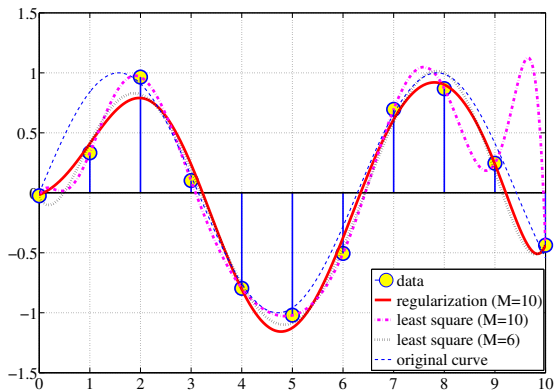
$$c = \left(\Phi^T \Phi \right)^{-1} \Phi^T y$$

- 正則化法による多項式の係数

$$c = \left(\lambda I + \Phi^T \Phi \right)^{-1} \Phi^T y$$

- もし $\Phi^T \Phi$ が正則でなくても、 $\lambda > 0$ なら、 $\lambda I + \Phi^T \Phi$ は**正則**となる (正則化の名前の由来).

例題

 $M = 10$ 次の多項式による正則化

まとめ

データ $(x_1, y_1), \dots, (x_N, y_N)$ が与えられたとき, このデータ点のなるべく近くを通る多項式曲線

$$y = f_M(x) = c_0 + c_1x + c_2x^2 + \dots + c_Mx^M$$

を求めよ(係数ベクトル $\mathbf{c} = [c_0, c_1, \dots, c_M]^T$ を求めよ).

- 多項式補間: $M = N - 1$ とし, $\mathbf{c} = \Phi^{-1}\mathbf{y}$
- 最小2乗法: $M < N - 1$ とし, $\mathbf{c} = (\Phi^T\Phi)^{-1}\Phi^T\mathbf{y}$
- 正則化法: $M = N - 1$ とし, $\mathbf{c} = (\lambda\mathbf{I} + \Phi^T\Phi)^{-1}\Phi^T\mathbf{y}$